

助産学専攻開校にあたって



専攻科助産学専攻 小林 美代子

はじめに

新潟県立看護短期大学助産学専攻科は、平成9年4月に開設以来、8年間に112人の修了生を送り出し、今、幕を引こうとしています。斎藤秀晃先生が学長のおり、短期大学からの一貫した専門的な教育を行うとともに、県の看護ニーズに対応する助産師を育成する目的で開設され、助産教育の機会を短期大学卒業生のみならず広く門戸を開け育成に携わってきました。

この間、開設にご尽力された川崎佳代子教授を始め、村山ヒサエ教授、伊藤セツ子教授、近藤好枝助教授、他にも多数の教員の方々が助産学教育に力を注いでこられました。

私は、助産学専攻科開設にともない就任し、8年間助産学教育に携わることができましたので、これまでを振り返ると共に今後への希望を述べてさせていただきます。

変化と試行錯誤

8年間は教育機関の存続としては短い期間ではありますが、助産学専攻科をとりまく変化は大きく、その中で教員として試行錯誤を繰り返してきました。

1. 分娩体位

周産期における妊産褥婦に対するケアは、助産学において重要なところですが、中でも分娩介助は中心とも言える部分です。その分娩期において、女性の社会進出が進んだことや出産に関する情報が多く得やすくなったこと、個人の価値観の多様化などに伴い、単に安全のみならず産婦のニーズの多様化が日に日に進ん

でいます。

分娩体位を取り上げてみても、大きな変化がうかがわれます。明治以降の助産婦教育の中で広められて以来、これまで長く普及していた仰臥位での分娩の見直しが注目されるようになったのは、1979年のカルディロCaldeyroの報告以来ともいわれます。最近はEBMに基づいたケア、産婦が主体的に臨む出産が提唱され、介助者にとっての利点が多い仰臥位分娩を見直し、フリーな体位での出産（フリースタイル出産）を支援する施設、助産師が増えてきています。助産師国家試験においても、これまで分娩介助といえば当然のごとく仰臥位分娩を想定していたものが、平成16年の助産師国家試験では、フリースタイル出産に関する出題がされるようになりました。

仰臥位を助産の基本体位と考えるのが妥当なのか否か。少なくとも仰臥位だけが助産の体位とはいえません。しかし、現実には多くの施設で行われているのは仰臥位での分娩です。学習方法を試行錯誤してみるのですが、学生が実際に臨床で実習することを考えると、やはり仰臥位での分娩介助が学習の中心となり、さまざまな体位については可能性を検討するに留まっていました。これからの助産学を学ぶ学生には、さまざまな体位での分娩介助が学べるよう実習も含めた機会が設けられることを希望しています。

2. 会陰の保護

体位と合わせて、1997年に翻訳・出版された「WHOの59ヶ条—お産のケア実践ガイド」では、これまで胎児の娩出の場面で広く行われてきた会陰の保護が、十分な確証がなく、まだはっきりと勧めることができないケアとしてとりあげられました。それは、学生時代に仰臥位分娩での会陰の保護を重要な助産技術とし

て学習してきた者として、予測はしていたもののやはり衝撃でした。

分娩介助学の講義を担当するようになり、まだ分からないことを伝えるわだかまりを感じながら、ともすると分娩介助技術イコール会陰の保護の技術と受け取られがちであるが決してそうではなく、一連のケアを行うための思考過程に基づく技術であること、また会陰の保護は単に会陰に手を当てる技術のみをさすわけではないと言いつけてきました。

会陰の保護に限らず根拠が未だ明確にされていないことが多い中、根拠を明らかにしていくことや、他の方法についても可能性を追求していく努力が必要であること、思考し実践すること、そしてまた思考することの大切さを伝えることが私の仕事だと思ってきました。学生たちは、産婦に合ったさまざまな援助の方法を、実践の中で試み検討していたと思います。そのような試みの先に現れてくるものを期待するものです。

3. 学生の変化

助産学専攻科開設当初から学生は、短大の卒業後すぐに入学する学生だけでなく、他の卒業生や勤務経験のある人、臨床からしばらく離れていた人と、その背景や準備状態、年齢はバラエティに富んでいました。最近になって看護系大学を卒業生した学生も入学してきました。これも看護教育の大きな流れの中での特徴といえるかもしれません。

また、最近は大学における看護実践能力の育成・充実が検討されつつあるものの、カリキュラムのスリム化や少子化が進む中で、分娩に立ち会ったことがない、一人の褥婦と2・3日関わった体験しかない学生が増えてきました。一方、助産学生には、さらなる理論と技術を実践できることが要求される傾向にあります。年々看護での実践体験が減少する中、助産学生に望まれる能力と入学時の能力の乖離が広がってきたような印象さえるのです。

4. 実習場所

少子化による影響も大きなものがありました。上越市においても出生数が減少し、分娩介助の機会が減少するとともに、数ヶ所の医院が開業したこともあり、妊婦にとっては選択肢が増え、これまでのように総合病院に集中することなく分娩が分散していきました。当専攻科では開設時から総合病院2施設の協力を得て

分娩介助の実習を行ってきました。しかし、年を経るほどに開設時の実習期間・方法では産婦の介助に関われる機会が減少し、そのため毎年のように期間や方法を修正せざるをえない状況にありました。分娩介助の件数だけでなく、その質を高めていくことも重要と思いつながらも、学生にとって学習しやすい機会や環境を整えることは容易なことではなく、実習施設の皆様の多大なご協力によりようやく実習が成り立っていたといえます。それでも十分な環境を準備できたとはいえ、私自身力不足の感はいなめませんでした。助産学教育において臨床の協力は不可欠であり、臨床との連携をより深く、また広げていくことが重要になってくるのだと思います。

さらに、これからの助産は、周産期にある妊産褥婦や新生児に対して目を向けるだけではなく、女性の生涯における健康（とりわけ性と生殖にかかわる側面）や、地球規模といった広い観点からの活動に目を向けていこうとしています。わずかながら実習機会を取り入れましたが、やはり周産期での講義・実習が中心となっていた様に思います。すべてのことを実際と結びつけることはできませんが、限られた時間や機会をいかに有効に活用できるか教師の力量が問われるということにもなるのだと思います。

8年間を支えてくれた学生へ

助産学専攻科の1年は、学生にも過密ともいえるカリキュラムや、長期に渡る昼夜を問わない実習など、多くの困難さを乗り越えてもらわなければなりません。にもかかわらず学生は、こちらの想像を超える力を持っていることを実感させてくれました。本当によく立ち向かってくれたのだと思います。

私自身は、自分の力不足に落ち込んだり、昼夜なく学生とともに実習に走り回り、時にくたびれ果てそうになったこともありました。しかし、8年間という月日を振り返ってみると、学生に励まされ、力づけられ、ここまで来ることができたをつくづく思います。学生とともに学んだというのが実感です。泣いたこと、喜んだこと、叱ったこと、笑ったこと、悩んだこと、考えたこと、ひとりひとりの顔や出来事が思い浮かびます。

助産学教育の中で、理論と技術は共に大切なものです。しかし、理論を学び技術を同様に習得したとし

て、一人の妊産婦に提供されるケアは必ずしも同じものとはならないでしょう。そこには、助産哲学ともいべきものが問われてくるのだと思います。一人ひとりの方との関係性において、理論と技術を実践する中で問う学生であってほしいと願ってきました。そして、これからも理論や技術を追求し、また助産とはと問い続けていってくださることを希望しています。

おわりに

助産学専攻の学生教育に携わって8年、こうして大破なくやってこられましたのも、これまで助産学教育のためにご尽力、ご協力してくださった諸先生方なら

びに関係機関の方々による賜物と、この場をおかりして深く敬意を表するとともに心より感謝申し上げます。ただ村山ヒサエ教授が就任半ばにして突然他界されましたことは、誠に悲しい出来事でした。先生は私の助産婦学生時代の恩師でもあり、助産学専攻を担当するようになった私をいつもサポートしてくださっていました。感謝と共に、ご冥福をお祈りいたします。

また、後半の4年間は共に助産学専攻科の担当教員であった高橋初美先生のお力なくしては任を果たすことができなかったと、感謝しております。

最後に修了生の方々のますますのご活躍とご健勝を心から祈念する次第です。

(新潟県立看護短期大学講師)